

那須看護専門学校では、令和3年度の学校運営評価を行いました。

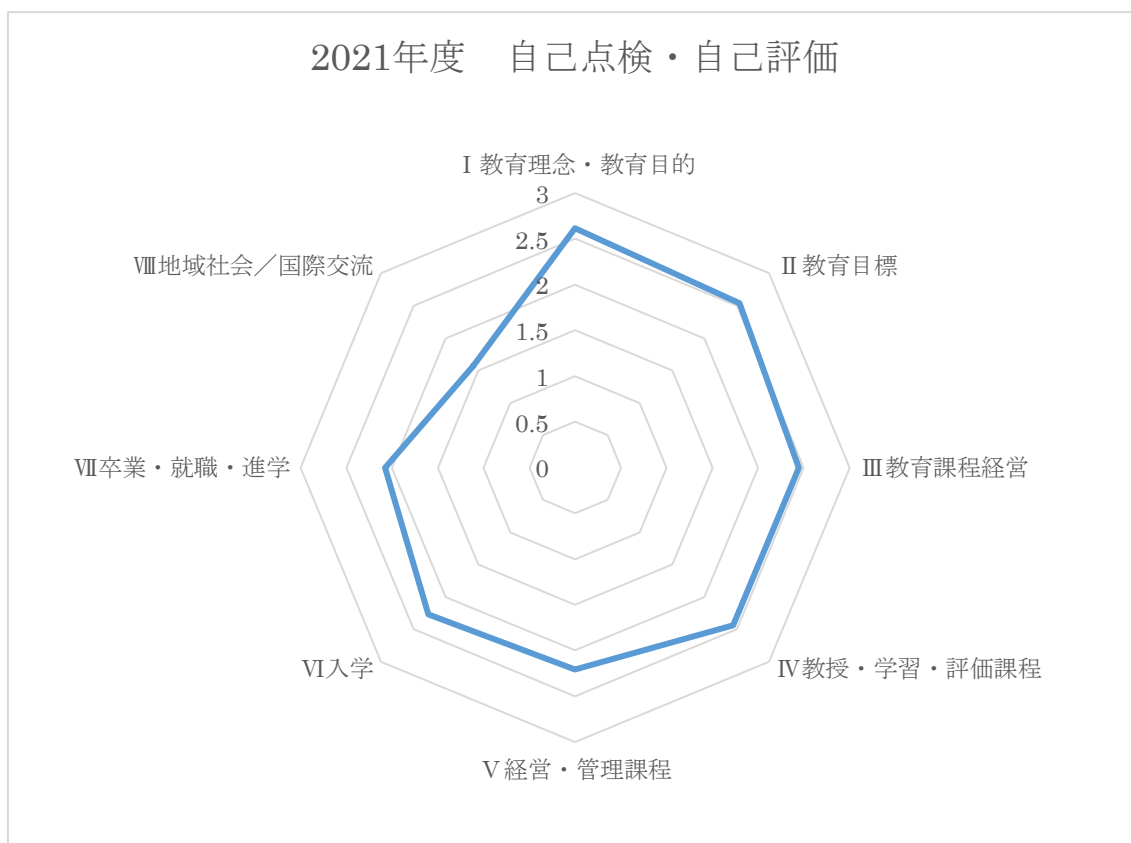
評価尺度は、

3：良い、 2：ふつう、 1：不十分

の3段階です。

1. 自己点検・自己評価の結果

評価項目	I 教育理念・目的	II 教育目標	III 教育課程・経営	IV 教授・学習 評価過程	V 経営・管理過程	VI 入学	VII 卒業 就職 進学	VIII 地域社会 国際交流
評価	2.6	2.5	2.4	2.4	2.2	2.3	2.1	1.6



2. 評価結果の概要

I・II 教育理念・目的・目標について

昨年同様、母体である菅間記念病院の「博愛」の精神のもと、地域の方々の生活に寄り添いながら医療・看護を行う実践者を育てていくという使命を職員全員で再確認した。学生には、この地域に貢献できる看護師を育てたいと講義や実習指導の中で常々伝えていくようにし、自覚も持ってもらえるよう動機づけていきたい。1年生は新カリキュラムに地域の理解が多く取り入れられているが、2・3年生にも、演習や実習で生活者として「患者」を理解させる指導を増やし、地域における保健・医療・福祉を取り巻く多職種との協働について学ぶ機会を作っていきたい。

III. 教育課程経営について

教育理念・目標に基づいて科目構成の考え方を示している。単位履修方法については、入学時や各年次のガイダンスにおいて具体的に説明し、担任が個別に指導を行っている。昨年に引き続き、学生が学習準備を整えられるよう、また復習時間を十分に持てるよう自主学習方法についても意欲をもって臨めるよう支援していきたい。

特に、2年生と令和4年度入学生から適応される学則・規程との相違があるため、休学・原級留置者には特に細やかな説明や対応をして、スムーズに学習が進むようにしていくことが必要である。

IV. 教授・学習・評価過程について

学生が主体的に取り組み、自己評価し成長できるよう科目間の関連性や授業の目的・到達目標・授業計画・評価などを明確にしていく。
教員組織におけるそれぞれの役割や業務内容の見直しを行い、委員会の再編をした。今後はさらにその活動が定着するよう努めていきたい。
教職員の育成については、自らの教育実践力の向上につながる研究活動に積極的に取り組んでいきたい。そのためには、実習指導教員を含めた、資格・要件を備えた教員の確保を引き続き努力していきたい。

V. 経営・管理過程について

学生生活への支援として、健康診断やその後のフォロー、カウンセリング室の開室など適時に行えるようにしている。カウンセラーによる相談時間は、昼休みから2時間とし、学生が利用しやすくしており、利用者数も増えている。施設・設備については、Wi-Fiが利用できる場所を新設し、日頃から学生

が学習しやすい環境づくりを今後も計画的に進めていきたい。

危機管理については、特に新型コロナウイルス感染症の感染防止対策について日々取り組んできた。学生・教職員共に感染者が発生したが、規定通りの検査や自宅療養などにより、クラスターの発生はなく、母体病院の多大な協力もあり、実習や授業も滞りなく進行できた。対象学生の不利益もなく教育課程の運営が継続できている。

VI. 入学について

R3年度は、41名の入学生となっている。学校長自らの学校訪問や、教員による広報活動の充実の成果と評価できる。

学校のPRと看護の魅力を語ることでこの道の選択をPRする活動を年間通して行っている。オープンキャンパスでの対応も高い評価を得ている。

今後は、休学者・退学者を出さないようにすることが重要と考える。

そのためには、入学者のこれまでの学習状況を入学前から把握して、看護学校での学習のニードとらえるとともに、興味・関心をどう高めていくかを前期のカリキュラムへの工夫も含めて検討していきたい。

VII. 卒業・就職・進学について

卒業生30名中、19名が県北の病院に就職した。(63.3%)

各病院に就職した卒業生が今年は7年目を迎え、病院の中核を担う存在となっている。今後も、学生の個々の課題や将来に対する思いを受け止め、自己肯定感を高めていけるようなきめ細やかな指導や働きかけを継続し、就職への支援体制を充実させていきたい。

また、国家試験合格100%を目標に、学年に応じた国家試験対策に則り、1年次から意識を高めていく。特に3年生には個別の指導を精力的に行っているが、今後も継続していく。

VIII. 地域社会・国際交流について

那須塩原警察署より依頼されている「交通安全リーダー」の役割を通して、地域の方々と触れ合う機会を持たせていただいているが、R3年度も警察署より感謝状をいただいた。

今後、新カリキュラムの重要ポイントでもある地域包括ケアシステムの中で看護が実践できるように、2・3年生も地域における医療連携の実際を知ることや、地域で生活する人々の健康に目を向けることができるように、地域の人々との交流がもてるような機会を計画していきたい。